

平成30年度

研究総論

研究主題・副題

共に創りあげる授業

－「教科ならではの文化」を味わう子どもたち－

1 はじめに

教科で授業実践をしていく中で、「どのような題材であれば、子どもたちは授業を楽しむことができるのか」「この単元で子どもたちは何を学ぶのか」「子どもたちが深く学ぶことができる授業とは」と課題をもち、日々悩まれている先生方も多いでしょう。

私たちも同じような課題をもち、悩みながら授業づくりを進めています。よりよい授業について追求していくと、「よい学び合いとは何か」

「子どもたちに何をどのように学んでほしいのか」といった疑問に出会います。教科の専門家として授業を実践する私たちは「その教科を学ぶ価値は何か」という問いに向き合い、子どもたちが教科のもつおもしろさや魅力に迫ることができる授業づくりをめざしています。

このような授業づくりを考えるうえで、どのように教えるかではなく、実際に子どもたちがどのように学んでいくかを捉えて、これまで研究をすすめてきました。特に授業における子どもたちの対話に注目し、「仲間と学ぶ中で、どのような言葉を用いて、どのように伝え合い、教科本来のおもしろさや魅力を感じているのか」について、子どもたちのあらわれから見いだしてきました。

私たちの示す「共に創りあげる授業」に向けた研究は、主体的に学び続けていく子どもたちを育むことにつながるでしょう。そして、授業実践者である先生方の授業観や子ども観を豊かにしていくものであると確信しています。

2 私たちがめざす「共に創りあげる授業」とは

共に創りあげる授業 —教科ならではの文化を味わう子どもたち—

(1) 教科で人を育む

将来の予測が難しく、多くの問題を抱えながら変化し続ける現代社会を生きていく私たちは、主体的に課題に向き合い、他者と協働しながら課題解決に取り組んでいくことが求められています。また、現代社会に山積する問題は、様々な考えや価値観が複雑に絡み合い、一つの正解によって解決できないものであることが多いでしょう。このような状況だからこそ、子どもたちが多くの人や社会とつながりをもちながら、誰もが幸せに生きていくことができる社会づくりに参画し、より充実した生き方を切り拓いてほしいと、私たちは願っています。

このような子どもたちを育てていくために、教科において、子どもたちは何をどのように学んでいく必要があるのでしょうか。おそらく、教科書にある語句や知識をただ覚えるだけでは、これからの社会に対応していくことは難しいでしょう。

教科で人を育むということは、教科の学びを通して、子どもたちの生き方にも影響を与える必要があるということなのでしょう。そのためには、表層的ではなく、教科のもつ本質的なおもしろさや魅力を感じ、その価値を見つめ直したり問い直したりしていくことを通して、その教科の本質を自分の中に取り込んでいくことが欠かせません。だからこそ、私たちはその教科に思

いや願いをもちつづけ、教科の学びを通して人を育むことを念頭に置き、子どもたちを育みたいと考えるのです。

例えば、英語科で人を育むためには、英単語をたくさん知っていたり、文法を正しく説明できたりということではなく、実際の英語でのやりとりを通して、異言語や異文化、またそれらをもつ人々に対する思いや考えを異なる視点で捉え、多様な人々への思いや考えを磨き合っていくことが必要だと考えます。そして、言語そのものに対する捉えを深くしたり、英語の世界観や人々に対する思いを豊かにしたりすることで、異文化とのかかわりを考え直し、「もっとかかわりたい」「このようにかかわりたい」という思いを抱き、実践につなげようとするのでしょう。

このように、教科の本質に迫る学びは、子どもたちの見方や考え方を広げ、ふるまいや生き方まで変えていくような人間形成を図る学びにつながると考えています。

(2) 教科ならではの文化

それでは、教科で人を育むために必要なのはどのような授業なのでしょう。それが「教科ならではの文化」を味わう授業なのです。

先人たちは、絶えずよりよいものを生み出そうと、多様な考えをもつ他者とかかわりながら、ものごとの根本に立ち返って、その意味を見つめ直したり問い直したりしながら、新しい文化

を創りだしてきました。そのようなよりよいものを創りあげる「共同体の営み」に参加していくことが、新たな文化の担い手を育むことになるのです。ここで述べる文化とは、人々が築いてきた文化遺産そのものよりも、人々がそれらを築いてきた営みを指します。この営みに参加することを通して、その共同体にふさわしいふるまいを身につけていくのです。

例えば、教育に関する知識をもっているだけでは教師になったとは言えません。教師集団という共同体の営みに参加していくことで、私たちは経験を通して教師として生まれ、教師らしくなっていきます。同様に、教科で人を育むためには、その教科らしい営みを教室に生み出し、子どもたちがその営みに参画することが必要なのです。このように、教科本来の魅力にふれながら、子どもたちが互いの考えを吟味し合い、題材にある価値を追い求めたり、新しい概念を生み出したりしていく営みを「教科ならではの文化」と考えました。

授業において「教科ならではの文化」を子どもたちが味わうためには、子どもたちの対話が欠かせません。子どもたちは「何を解決したいのか」を共有し、その問いを追求することで、題材のおもしろさや魅力を自分の言葉で表現しながら、その教科らしい学び合いをすすめていきます。子どもたちは、1時間ごとの切り抜かれた授業ではなく、題材全体を通して、一貫した問いの解決のために、それぞれの考えを伝え、吟味し合い、磨き合うような学びを通して、題材に含まれる知識や技能、題材に根づいた価値や考え方を学んでいくことでしょう。このように、教科らしい考え方や学びをくり返し経験することで、さらに「教科ならではの文化」がしみた考え方やふる

まいが自分のものとなっていくのです。

以上のように、子どもたちは仲間とかかわり合い、教科本来のおもしろさや魅力を感じながら、新たな価値や多様な考え方、表現などを創りあげていきます。このような営みを巻き起こす授業が、私たちがめざす「共に創りあげる授業」なのです。

(3) 新学習指導要領とのかかわり

本校では、子どもたちが仲間と対話をするなどの協働的な学びを展開していく中で、活きた知識や技能を活用しながら、教科の本質に迫っていきます。子どもたちの対話においては、情報や資料を整理しながら自分の考えを他者にわかりやすく伝えたり、他者の考えを自分の考えと比較しながら新しい発想を生み出したり、視点を変えて考えていったりするでしょう。「教科ならではの文化」を味わっている子どもたちの対話は、教科ならではの見方・考え方を働かせた学び、つまり、深い学びを実現することにつながると考えられます。

これらのことから、本研究における授業実践は、平成29年3月に告示された新学習指導要領において、育成をめざす資質・能力の柱として示された、「知識及び技能が習得されるようにすること」「思考力・判断力・表現力等を育成すること」を包括する学びと考えることができます。さらに、よりよいものを追い求め、文化的実践へ参加する子どもたちの姿をふまえれば、「学びに向かう力、人間性等を涵養すること」にも寄与すると考えられます。このように、本校で実践している「共に創りあげる授業」では、子どもたちが「教科ならではの文化」を味わう経験を積み重ねることで、上記の資質・能力を一体的に育むことができると思います。

3 本研究のあゆみ

本研究は、以下のような流れで研究をすすめています。授業後の分析による、具体的な子どもたちの姿を裏づけとして明らかになった、「共に創りあげる授業」を実践するうえで大切な要素を以下のように見いだしてきました。

研究初年度

「問いが共有されていること」

理科の授業において、水溶液に含まれる粒子を“見える化”していくために、複数の実験結果を総合的に結び付けて解決していこうとする子どもたちの学びから、子どもたちが共通した問いをもつことが、問いの解決に向けて「どのような実験をして追究すればよいか」という道筋や、異なる実験方法や実験結果から互いの解決方法がどのように結びついていくのか、ある程度の見通しをもつことにつながり、子どもたちの学びが深まる要因の一つとして見いだされました。

「授業者の手だてが必要であること」

子どもの学び合いを生むためには、話し合いに必要とされる共通の土台(知識や技能、とらえなど)を固めておくことや、子どもたちがかかわり合うことができる個への支援(声かけや説明の仕方の提示など)を行うことなどの授業者のふるまいが必要であると確認されました。



研究2年目

「互いの考えをすり合わせている姿」

英語科の授業における、「尊敬する人を紹介する」ためのスピーチ原稿を互いに修正し合う学び合いにおいて、子どもたちが問いを共有したうえで、仲間の考えの根拠やその考えに至る筋道などについて考えを伝え合ったり、建設的な批判をし合ったりすることで、互いのスピーチをより魅力的にしようとする姿が見られました。このように、互いの考えをすり合わせる場を設定することが、子どもたちの主体的な学び合いを生む要因となり得ると見いだされました。

「子どもたちの思考に寄り添うこと」

子どもたちがどのような疑問や解決したいことをもっているのか、授業者は事前に把握し、子どもたちの自然な思考を意識しながら適切なかかわりをするすることで、子ども同士のすり合わせ方や解決していこうとする方向が変わっていきました。

「多様な創りあげ方(解決のしかた)を経験すること」

「英語表現にこだわること」「内容面での過不足にこだわること」など、子どもたちが多様な解決のしかたを経験することが、相手に印象的に伝わるスピーチ原稿を仕上げるための対話の質を上げる可能性があるのではないかということについて議論されました。また、子どもたちのそれぞれの教科には、教科ならではの学びがあることに着目し、教科性、つまりその教科で学ぶべき本質を重視して授業実践をしていくことが課題としてあげられました。



研究3年目

「教科ならではの文化」

前年度の「子どもたちの対話の質」という視点をもとに、子どもたち同士の深まりのある対話に着目し、対話の内容（中身）について丁寧に構想していきました。そこでは、主体的に議論に加わり、題材のおもしろさを味わう子どもたちの姿を見いだすことをねらいました。子どもたちの対話の中身として、授業者がその教科で迫ってほしいと願う価値について対話されるように構想することが、授業づくりの視点として欠かせないことが確認されました。このような教科の本質に迫る子どもたちの営みを「教科ならではの文化」と示しました。

「対話を生む手だて」

国語科の題材「素顔同盟」では、子どもたちが作品から読みとった「作者が意図的に用いた表現」や、「その表現に込められた作者の意図」をもとに対話が進み、物語の構造が黒板に図示されていきました。題材全体を通した分析をもとに、学び合い（対話）が深まるためには、授業者の意図的な手だてを構想にもりこむ必要があることが確認され、授業者は、子どもたちのあらわれや授業者のかかわりを見通しをもち、子どもたちの言葉やふるまいをていねいに捉えて、意図的にかかわっていくことが、学び合い（対話）を生むために必要であると話し合われました。



研究4年目

「教科ならではの学び合い」（対話） 「異なる視点から考える題材」

数学科では、確率について深まりのある対話を生むために、授業者の具体的な手だてとして、統計的確率・数学的確率の二つの異なるグループによる追究と対話を構想に含めた結果、確率に対する捉えを深めていく子どもたちの姿が見られました。このように、異なる視点から考える題材は、題材の本質に迫りやすく、教科らしい考え方を働かせて対話をしていくことが確認されました。

「教科ならではの文化」

美術科では、よりよい机と椅子のデザインを構想する授業において、問いを共有したうえで、デザインや機能美について互いの思いや考えを伝え合おうとする子どもたちの姿が、「美術科ならではの文化」を味わう姿として見いだされました。他教科においても、このような「教科ならではの学び合い」（対話）を具体的な子どもの姿で捉える必要があると見いだされました。そして「共に創りあげる授業」における子どもたちによる営みを「教科ならではの文化」としました。

4 本年度の研究の流れ

本年度は、子どもたちの姿をもとに、教科の学びのあり方をさらに明確にしていくために、以下のような研究をすすめていきます。

まず、教科においてどのような人間を育みたいのか、そのためにどのような学び合いが必要なのか、その教科らしい授業のありようを「教科の主張」としてまとめていきます。「教科の主張」には「教科で育みたい人間像」と「教科ならではの文化」、さらに、「授業づくりで大切にしていること」について記述します。「授業づくりで大切にしていること」では、「教科ならではの文化」が味わえるような授業を具現化するうえで、教科で大切にしていることや授業づくりに欠かせない要素を明記していきます。

次に、教科の主張をもとに授業実践を重ねて

いく中で、子どもたちが協働的に学び合う場面を観察し、「教科ならではの文化」を味わう姿をみとっていきます。観察した子どものあらわれの意図や背景、そのようなあらわれが生まれた要因を解釈しながら、授業者の手だてや構想が、「教科ならではの文化」を味わう子どもたちの姿を引き出すことにつながったかどうか、考察していきます。その際には、それぞれの教師の見とりや解釈の違いなどをもとに、異なる視点で子どもたちの学び合いを見とっていくことができるでしょう。

このような実践と分析（考察）を積み上げることで、「教科ならではの文化」を味わう子どもたちの姿や「授業づくりで大切にしていること」をさらに見だし、「教科の主張」を更新していき

ます。

また、年間を通じて、様々な先生方との意見交換や授業検討、他の研究をすすめられている学校からのご示唆も十分に反映させていただき、

年度末には、本研究における教科での成果や課題を整理しながら、授業観や子ども観をさらに問い直していき、次年度につなげていきたいと思いをします。

5 おわりに

「教科で人を育てる」。私たちは子どもたちと多くの時間を授業の中で過ごします。したがって、教科の授業で子どもたちを育みたいと考えるのはとても自然なことです。しかし、実際のところ、「教科の授業がどのように人を育てていくのか」などと考える機会は多くありません。それでも、子どもたちの視点に立った授業づくりについて考え、もっと子どもたちがその教科の学びを楽しむ授業を実践していきたいと切望しているはずで

す。私たちの研究が、協議会に足を運んでくださった参加者の方、研修会で議論を交わした多くの先生方、そして研究を共にする仲間を通じて、今後も形を少しずつ変えながら、多くの子ども

たちを育むことにつながるのであればこれほどうれしいことはありません。教育研究協議会において議論されたことにより、私たちの授業観が一層磨かれ、本校の研究が私たちの大きな希望のもと、多くの先生方に向けて発信され、子どもたちを育むことに貢献していくことを願います。

教育研究協議会においては、皆様から腹藏ないご意見をいただきつつ、学びについて共に学ぶ教育実践者として語り合うことができれば幸いです。最後になりますが、本研究の講師としてご指導ご助言をいただきました東京大学高大接続研究開発センター教授の白水始先生、静岡大学大学院教育学研究科教授の村山功先生に厚くお礼を申し上げ、結びといたします。